様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００４１３

研究課題名（和文）19世紀英国予約購読形式出版と読書施設の相関が文芸出版文化の興隆に果たした役割

研究課題名（英文）Achievements of the Correlation between Publication by Subscription and Libraries in the Rise of Literary Publishing Culture in 19th-century Britain

研究代表者
小林　英美（KOBAYASHI, Hidemi）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２７７８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀末から19世紀前半の予約購読者と会員制有料図書館の読者層の相互関係が、文芸出版文化の現代に通じる多様性を生成する起点になったことを具体的な事例から示唆した。特に詩人コールリッジやサウジーは作家としても予約購読出版に関わり、少年時代から各種図書館の利用者でもあったので恰好の事例と言える。この事例以外にも、作家が図書館の会員であったり、作家が予約購読形式を利用した事例は多々あり、一方で図書館が予約購読形式で書籍を購入したり、作品の書評を掲載した定期刊行物を蔵書にしていたので、会員だけでなく、作家・文学作品に影響を及ぼしうることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文学作品の受容研究の新たな観点を提供した研究と考えられる。会員制有料読書施設は、事前登録した会員から成り、予約購読出版は予約者によって成立するので、二つの読者層の対照研究と換言できるからである。本研究成果は、二つの読者共同体を具体的な記録を照応して、共通する読者や文芸嗜好等を導き出したことで、二つの共同体が文芸・出版文化に及ぼした相乗効果の実相を明らかにしたのである。またそれは、現代的な文芸・読書文化の起点とも言え、この相互影響関係は、常に振り返るべき要諦としての社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research delves into the intricate relationship between subscription readers and membership library users during the late 18th and early 19th centuries, proposing that this dynamic interplay served as a pivotal force in shaping the multifaceted literary publishing culture we witness today. The cases of poets Samuel Taylor Coleridge and Robert Southey serve as compelling examples of this intertwined relationship. Both poets actively engaged in subscription publishing as authors while simultaneously being avid patrons of various libraries from their youth. These cases are not isolated; a wealth of evidence points to a broader phenomenon: authors who were library members or utilized the subscription format, and libraries that not only acquired books through subscriptions but also housed periodicals containing literary reviews. This multifaceted interaction suggests that libraries exerted influence not only on their patrons, but also on authors and the literary landscape itself.

研究分野：英文学および英語圏文学関連

キーワード：19世紀　英国文学　読書文化　出版文化　パトロン（出資者）　会員制有料図書館　予約購読形式出版　文学受容研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

１８世紀末から１９世紀前半の文学研究において十分に進んでいない課題の一つが、予約購読出版を中心にした読者層と文学の相互影響関係の研究である。作品自体とともに書籍に印刷された購入者情報を手掛かりにした研究で、読者層の嗜好や芸術的・社会的人脈、同時代の出版戦略等、研究応用範囲は広い。先行する研究は、出版史や書誌学の観点からの研究は進んでいるが、文学作品との相関という観点では、国内外ともに十分な研究がなされていない。

本研究では、特に予約購読者層と会員制有料読書施設の相関関係に注目することにした。多様で小さな需要と供給を叶える上掲二つのコミュニティの読者層の連関は、図書館の蔵書になった定期刊行物で結ばれており、この実像を解き明かすことによって、文芸・出版文化の多様性と柔軟性を獲得させた経緯を、一次資料を基盤にして実証的に明らかにできると考えたのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、予約購読者層と会員制有料読書施設という二つの読者コミュニティの連関が、同時代以降の文芸・出版文化の多様性と柔軟性を獲得させた経緯を、文学作品や作家等の事例と定期刊行物の機能に着目しながら、実証的に明らかにしようとするものである。

会員制有料読書施設は、事前登録した会員から成り、予約購読出版は予約者によって成立するので、二つの読者層の対照研究と換言できる。双方ともに名簿によって読者の特定ができ、また蔵書記録と出版情報・出版社出納帳があるので、出版状況と文芸嗜好の関係を考察できる。つまり本研究は、二つの読者共同体を、名簿等の具体的な記録を照応することで、共通する読者や文芸嗜好等を導き出すとともに、出版社の情報もふまえることで、二つの共同体が文芸・出版文化に及ぼした相乗効果の実相を、明らかにするものである。

３．研究の方法

応募者がこれまでに構築して使用してきた予約購読者情報データベースとともに、調査対象とした各地の会員制有料図書館の蔵書情報と会員名簿、そして出版社のアーカイヴ等の諸情報を、段階的に分析して考察を進展させることによって、二つの共同体が文芸・出版文化に及ぼした相乗効果の実相を明らかにする。

初年度は、準備段階で抽出済みの約１２件の会員制有料図書館の調査を、各年度およそ３件行う。電子化資料を精査し、蔵書一覧、会員名簿、運営記録、出版社との取引記録等を入手する。現地でのみ入手可能な資料は２・３年度に入手する。２年度目以降は、会員制有料図書館の蔵書一覧の精査で各図書館の文芸嗜好等の考察も行う。平成２２－２５年度基盤研究（C）の成果を踏まえて定期刊行物 の蔵書傾向についての考察も行う。会員制有料図書館の名簿を予約購読出版形式発注一覧と照応し、共通する読者や関係のある読者･団体等を抽出し、人脈と施設の相関、図書館の運営、地域社会での影響力を明らかにする。さらに、上記の成果をふまえて出版社アーカイヴを精査し、出版社の予約購読形出版への加担割合、書籍商との関係、会員制有料図書館等の読書施設を商売上どのように認識していたかを、書簡や出納帳等から明らかにする。以上により、予約購読出版と会員制有料図書館の相互関係が、文芸・出版文化史において、現代に通じる多様性・柔軟性を生成・保証する起点になったことを、蔵書・会員名簿、予約購読者名簿、出版社資料等から複合的かつ実証的に明らかにする。なお出版社アーカイヴ調査は、初年度に規定し、対象施設から PDF 等で取り寄せ、それができない場合は現地調査を行う。以上の研究は、内外の研究動向に目を配りながら実施し、動向によっては適宜調整する。

４．研究成果

(１)初年度は基礎資料の収集とその分析であったが、当初予定のおよそ半分の会員制有料図書館の資料収集調査となった。コロナ禍の影響で海外図書館の閉鎖等があり、一次資料の獲得が進まず、多くはオンライン上のデータ等の電子媒体に頼らざるをえなかったためである。だが一方で、関連研究の調査を進める中で、新たな観点の研究資料の入手もできた。当初の計画においては想定していなかった１９世紀初頭までのアイルランドの読書サークルと貸本屋、そして出版業者についての研究書と、イギリス植民地下のアメリカ・ニューヨークの同種の読書施設についての研究である。これらの知見によって、ブリテン島内にとらわれない、トランス・アトランティックの広い観点を取り込み、鳥瞰的な観点で研究の方向性を獲得できることがわかったので、必要に応じて、次年度以降の研究に包摂することにした。

(２)２年度の成果は三つに大別できる。第１には会員制有料図書館での文芸嗜好についての研究である。２年度も一次資料の収集がコロナ禍でできなかったため、グーグルブックスや古書のリプリント本、オンライン上の各種アーカイヴ(Robin Alston Library History Statistics 等)、スコットランドとアイルランドの事例についてのキース・マンリー（Keith Manley）らの先行研究の見直しを行った結果、特にスコットランド、アイルランド、そして北部イングランドの図書施設の動向にも注目すべきことがわかった。第２には、上記の文芸嗜好の研究を、当初計画に即して平成２２－２５年度基盤研究(C)の成果を踏まえて実施した結果を、論文「同時代文芸批評

が代弁する『リリカル・バラッズ』の革新性―ジェフリー、ウイルソン、そしてグリーンウッド」に結実させることができた。定期刊行物というメディアの同時代の重要性を実証的に論証するだけでなく、本研究に連絡する意義がある発展的成果である。第３には、「ブロムリー・ハウス」（Bromley House）の名で知られるノッティンガム会員制有料図書館（Nottingham Subscription Library）の会員と蔵書についての調査研究の成果をまとめて学会で講演し、それを大幅に加筆して「公共図書館の起源―ノッティンガム・ブロムリー・ハウスの場合」として論文化し、地方都市の図書施設と読者層の拡大の実相を明らかにした。
(３)３年度も現地調査とそれに基づいた研究が、コロナ禍に起因する渡航・利用制限で多くを実施できなかったため、前年度と同様に電子書籍・オンライン情報での調査を続行したが、当年度は訪問予定施設の一つである前掲のノッティンガムの図書館の研究員とコンタクトがとれ、提供された閲覧予定の稀覯書情報（１９世紀当時の会員読者の書き込み等）の精査を開始した。一方で、文芸嗜好研究の派生として、英国内外で相互影響があった非英語圏文学とゴシック・原始主義嗜好の伝播を、読者と蔵書傾向の観点から、ドイツのビュルガーの「レノーレ」翻訳の事例を論文化した。図書施設が海外作品の流行に果たした影響についての大きさを明らかにできた。
(４)４年度もコロナ禍に起因する渡航制限で現地調査が実施できなかったため、その代替として、当年度もオンラインでの調査を続行した。その研究の成果としては、前年度の研究を発展させた「読者コールリッジの成長―定期刊行物と図書施設の影響」がある。前年度の論文ではノッティンガム会員制有料図書館に代表される地方都市の図書施設と読者層の拡大を取り上げたが、上記の研究では詩人コールリッジが利用した図書施設との関係だけでなく、ノッティンガムの読者層と彼との関係も追及し、図書施設を媒介にしたネットワークの関連性を明らかにした。また詩人ロバート・サウジーに関する研究「ロバート・サウジーの「戦う偉人」―『ワット・タイラー』、『ジャンヌ・ダルク』、そして『ネルソン伝』」でも、本研究の成果の一部を利用した。読者の人気と出版事情、そして読書施設の相関関係を論及したが、特にフランスのジャンヌ・ダルクについては、前年度の海外（ドイツ）文学作品嗜好の研究の派生事例にもなった。これは２０２３年度からの基盤研究（C）に引き継がれるものである。
(５)最終年度は、コロナ禍で実施できなかった現地調査を中心にした研究を行ったが、渡航費高騰のため、調査は予定の半分以下に大きく縮小せざるをえなかった。大英図書館とオックスフォード大学ボドリアン図書館では１９世紀初期の図書館蔵書目録を閲覧し、オンライン資料では確認できなかった遠隔地の図書館の記録を収集できた。そして前掲ノッティンガムの図書館では、前年度までの研究員との連携を活用し、１９世紀に開館した当時の規約や会員・蔵書リストの実物を精査することができた。入手した蔵書記録から予約購読出版の可能性のある書籍を抽出したり、蔵書となっていた定期刊行物の種類を確認する作業をしたりしており、現在も論文化の準備をしている。しかしながら、円安と物価高によって生じた経費の不足で、渡航が１回しかできなかったため、現地での資料収集は不十分なものになった。そのため、その収集資料を主体にした研究発表を創出するには至らなかったが、複数の研究発表の根拠に援用できる状況証拠として利用することはできた。
　本研究計画はその初年度からコロナ禍の影響によって計画に大きなゆがみと遅延が生じてしまった。それでも初年度と２年度では、紙媒体と電子化された資料によって会員制有料図書館の蔵書目録の調査を行い、各所の定期刊行物と文芸嗜好等の考察、さらには会員記録から地域社会での影響力等についての研究に発展させた。また本研究から派生・発展した読者と文学に関する研究を公表することもできた。以上のように研究の余地は残るものの、本研究は、予約購読出版と会員制有料図書館の相互関係が、文芸・出版文化史において、現代に通じる多様性・柔軟性を生成する起点になったことの一端を、多角的な研究論文・研究発表の成果によって、複合的かつ実証的に明らかにできたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小林英美	４．巻 30
２．論文標題 詩想の共有ービュルガーの「レノーレ」の英訳と定期刊行物	５．発行年 2022年
３．雑誌名 シェリング年報	６．最初と最後の頁 18－28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32297/schellingjahrbuch.30.0_18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小林英美	４．巻 70
２．論文標題 同時代文芸批評が代弁する『リリカル・バラッズ』の革新性―ジェフリー、ウィルソン、そしてグリーンウッド	５．発行年 2021年
３．雑誌名 茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学、芸術）	６．最初と最後の頁 121-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小林　英美
２．発表標題 読者コールリッジの成長―定期刊行物と図書施設の影響（コールリッジ生誕250年記念シンポージウム：「コールリッジと出版文化」）
３．学会等名 イギリス・ロマン派学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林　英美
２．発表標題 ロバート・サウジーの「戦う偉人」―『ワット・タイラー』、『ジャンヌ・ダルク』、そして『ネルソン伝』(「歴史上の人物は文学の中でいかに扱われているか II」)
３．学会等名 欧米言語文化学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小林英美
２．発表標題 図書館から拡張する読者ネットワーク～19世紀ノッティンガム
３．学会等名 欧米言語文化学会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小林英美、植月惠一郎、野村忠央、大野里枝、大森夕夏、岡田俊之輔、奥井裕、加藤良浩、鎌田明子、甲田亜樹、近藤直樹、佐藤亮輔、関田誠、中村善雄、古河美喜子、松本望希、森景真紀、山内圭、横山孝一、吉田一穂ほか	４．発行年 2021年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 636
３．書名 多次元のトピカ―英米の言語と文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関